

オーク×敗北剣士

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 敗北レイプ・快樂墮ち
- 体格差・輪姦
- ザーゲ口
- 腹ボテ・出産
- ちんぽケース

街から遠く離れた森の奥に黒髪青年が一人、剣を片手に戦いを繰り広げている。いや……いた、というべきか。

黒髪青年—ヨシュアはギルドの依頼で森の奥の洞窟に住むオーク退治に来ていた。しかし、ギルドの情報を遥かに上回るレベルのオークたちに囲まれてしまったのだ。

はじめは善戦していた。ヨシュアはギルドの中でも優秀な剣士であり、ソロでのクエスト経験も豊富。本来ならオーク程度に苦戦するような冒険者ではなかった。

——情報通りなら。

「っぐあ、っげほ、かひゅっ……」

苦し気なうめき声とともにヨシュアは吹き飛ばされ、大木の幹に叩きつけられてずるりと倒れる。

群れの中に、情報にない高レベルの上位種のオークが混ざっていたのだ。本来の群れのリーダーを下し、頂点に君臨するオークチャンピオンは……ヨシュアよりも強かった。

二メートルをはるかに超える体躯、筋骨隆々の丸太のように太い腕。身にまとっているのはぼろ布ではなく丈夫な鎧であり、位と知性の高さを示していた。

オークチャンピオンが倒れたヨシュアの手を蹴り飛ばす。

うめき声とともにオークたちの緑色の血で切れ味の鈍った剣がヨシュアの手の中から落ち、音を立てて地面に転がる。倒れ伏すヨシュアは致命傷には至っていないものの、戦闘継続が困難な状態だった。

(俺もここで終わり、か)

冒険者として生計を立てている以上、こんな終わりも覚悟していた。誇り高いヨシュアは潔く己の負けを認め、目を瞑る。

どうか、これがきっかけでより強い冒険者が派遣されてオークどもを根絶やしにしますように。何の罪もない街の人々に被害が出ませんように。そう祈りながら。

だが.....ヨシュアが覚悟していた致命傷となる痛みは、いつまで経ってもやってこなかった。代わりに髪が生え際に痛みが走る。髪を掴まれ、宙に持ち上げられたのだ。

オークたちは繁殖に他の種族、主に人間を苗床として利用する。

ヨシュアは男だ。己は殺されるだけであって、その対象に選ばれることはないと考えていた。だが、そうではない。

オークたちは優秀だと思った相手なら、雌雄関係なく苗床にしてしまうのだ。

それを、ヨシュアは知らなかった。

「ゴォォ！ウゴゴォ！」

オークチャンピオンは雄たけびを上げながら足で剣を蹴飛ばし、その場でヨシュアに覆いかぶさる。

人間の何倍もの重量のある身体で押しつぶされ、跳ねのけようとしてもびくともしない。そのまま着ていた鎧をはぎ取られ、シャツとズボンという普段着の部分のみが残されてしまった。

「いったい、なにをッ……！まさか……ひっ！？」

オークの不可解な行動に眉根を顰めるヨシュアだったが、次の瞬間己の下腹部にこすりつけられたモノを見て、一瞬で全てを理解してしまった。

下腹部にぬちぬち押し当てられたのが、長大すぎるオークの緑色の剛直だったからだ。しかも反り返り、先っぽには先走りを含ませていて、すでに臨戦態勢が整えられている。

ツンと鼻頭にくる悪臭に思わず端正な顔が歪んだ。しかしオークチャンピオンはそんなおかまいなしに血走った眼でヨシュアを見つめながら舌なめずりをし、腰を前後に動かし続ける。

「ま、まさか、俺に、挿れる気なのか……！？」

「ガァッ！」

「っく、無理だ、そんなの腹が裂ける……！殺すならいっそ、頭を叩き潰すなり首をへし折るなり、一思いにやってくれ……！こんなの、人間の死に方じゃないっ！」

当然、ヨシュアはこんな死に方なんて聞いていないと拒絶する。

悲鳴交じりの高い声に、チャンピオンはにたありと笑う。言葉が理解できたわけではない。ただ、声のトーンから怯えを感じ取り、それに悦びを感じているのだ。

だが同時に、このままではヨシュアが一瞬で壊れてしまうことも理解している。なにせこれまで、数多の人間を下し、その腹にオークの子供を宿させてきたのだから。

チャンピオンはヨシュアの首根っこを掴んで引きずり、口元に男の腕ほどもある雄を突きつける。

「ガウッ」

舐めろ。そう言われているのだと理解してしまい、ヨシュアはぎゅっと目を瞑ってそれを拒否する。

しかし選択肢などヨシュアにあるわけもなく、チャンピオンはヨシュアの前髪ではなく頭を掴み直す。

頭蓋骨のみしみしという音の恐ろしさに耐え切れず、ヨシュアは結局口を開いてしまった。

「んぶう！？」

ごちゅんっ♡

開いた瞬間、チャンピオンは容赦なくいちもつをヨシュアのそう大きくもない口にねじ込んでくる。亀頭が咽頭部分に当たるまで一気に貫かれ、顎が外れそうなほどの苦痛に襲われる。

しかも、動きを止めることもなく、突き入れた瞬間から腰を前後させ、どちゅっ♡どちゅっ♡と本能の赴くまま、ヨシュアの口をオナホとして使い始めた。

「んぎゅっ！？おご、つぶぎゅっ……っおあッ」

苦しい。ちんぽで気道を塞がれ口で呼吸ができない。鼻だって、あまりの悪臭に曲がりそうで、ひと呼吸するたびに頭痛がする始末だ。

当然味も最悪だった。オークちんぽのチンカスや先走りの味はこの世のものとは思えないマズさで、ヨシュアは思わず嘔吐く。胃液が喉元までせりあがってくるが、ちんぽのせいで吐くことすらできない。

「ふぐっ……っお、ごおゝ……ん、んううゝッ」

「っぐお、オオ……」

ごちゅ、ごちゅっ……ぐりゅりゅっ♡どちゅんッッッ

♡♡♡

チャンピオンが激しく腰を振り、喉奥から口蓋、口の中のありとあらゆる場所を勝手に使ってちんぽを気持ちよおく扱き続ける。先走りではないはずなのに、とぷとぷすさまじい量の体液があふれ出てきて、ヨシュアは窒息死しないために目を白黒させつつ飲み込んでいく。

（のみたくない、のにっ……でも嫌だ、こんな不名誉な死に方、嫌だ……ッ！）

目をぎゅっと瞑り、必死に飲み下す。胃の底にくっさい先走りが溜まっていくのを感じ、ヨシュアは心の中で絶望する。

苦しい、痛い、逃げたい。そんな負の感情にばかりに心をかき乱されていたヨシュアだが、ふいにどくんっ♡と大きく心臓が跳ねた。

「んうっ！？♡」

咽喉をごちゅりと突かれた瞬間、今まで感じたことのない甘く心地いい痺れが走る。

なんだこれは。快感？こんな状況で？ありえない！

理解ができず、ヨシュアは目を見開きぶるぶる震えた。

「ふぎゅっ♡っおご、っおお`エ`♡♡♡」

気持ちいい。苦痛しか存在しなかったはずなのに、突然快感が降ってわいたように溢れてきた。

胃の底から全身に波のように広がる快感は、苦痛を快楽へと変換し、身勝手にぬりつぶしていく。息ができないのも、顎が外れそうなもの、脈打ついちもつに喉奥まで貫かれるのも全部全部気持ちいい.....♡

下着の中に収まっている男の象徴は気づけば膨らんでいて、窮屈だと訴えてきている。

何故快感を突然感じ始めたのか。それはオークの精液には無理やり発情させ、感度を高める強力な媚薬効果があるからである。

暴力で支配するのは簡単だ。しかし中には自殺を選ぶものもいるし、母体が怪我をすれば生まれてくるオークの子供が死んでしまうかもしれない。

だが、快樂であれば自ら従順になり、子種を欲しがり孕みたがる。反乱の恐れもなく、安全に種付け、出産が可能といふことづくめなのだ。

ようするに、オークが種の繁栄のために進化した結果だった。

ヨシュアはそこまで知らなかった。なぜならヨシュアは男であり、ターゲットにされるのは女だと決めつけていたからだ。

快感に連動するように喉奥がきゅっと締め、チャンピオンはぐるぐる唸りながらラストスパートを仕掛けてくる。

「グルル、ゴオオオオッ！」

どちゅっぱちゅっ、どちゅんっっ♡♡♡

反り返った丸太のような剛直で喉の奥まで一息に貫かれる。

どく、どくんっ♡

脈打つちんこはよりいっそう膨らみ、射精するぞ♡子種を受け入れろ♡とヨシュアに迫り……とうとう決壊した。

びゅる、びゅるる、びゅくくうううっ〜〜〜ッ♡♡♡

「——〜〜〜ッッッごぶ、ぎゅ……♡」

しかし、痛みはなく、感じるのは快感だけ。

いいところを全部ぜーんぶ痛めつけられ、ヨシュアは白目になりかけつつ、吐きだされるヨーグルトのような精液を胃の中に直接流し込まれた。

(くしゃいっ、まず、いっ……しぬ、いきできな、しんでしまっあゝ……♡♡♡)

苦痛に塗れているはずなのに、精液を飲まされるヨシュアの顔はだらしなあく緩んでいた。

精液が胃の底に落ちるたび、身体が燃えるように熱くなる。最悪のまずさなのに、もっと欲しくなる。完全にヨシュアはオークの精液に狂わされていた。

「んく……こく、ごきゅっ……♡♡♡」

気づけば自らもっと♡もっと♡と望んで濃厚ぷりぷりオークザーメンを飲み干そうとしていた。それでも全ては飲み干せず、口の端からとろとろと零れ落ち、地面に落ちていく。

それでもオークは構わなかった。気持ちよく射精できて、しかも精液の効果が早くも効いている。こうなればもうこちらのものだ。

他の雑魚オークたちは、オークチャンピオンの獲物を血走った目で見ている。しかし力の強さが全てであり、彼が満足するまではおこぼれにあずかることができない定めであった。

「つぶあ……あえ、あへえゝ……♡ごぼっ……こひゅっ
……♡♡♡」

最後の一滴まで絞り出した後、オークはぱっと掴んでいた
ヨシュアの髪から手を離す。

ヨシュアはそのまま地面の精液だまりに倒れ、だらしない
顔をして舌を垂らし、目にハートマークを浮かべながら身体
を痙攣させていた。

吐きだされた精液の量が多すぎて、喘ぐたびに口からザー
メンがゲロとなって零れ落ちる。

だが、今のヨシュアはそれをもったいないとしか感じな
い。

快感の余韻に浸っていると、チャンピオンが再び動き始め
た。

「ゴォググルル、ッガァ！」

絶倫ともいうべきオークという種が、当然一度犯した程度
で満足するわけもない。すでに股間の凶器は復活し元通りに
そそり立っていた。

精液溜まりに沈んだヨシュアズボンと下着を引き裂いて
ボロ切れにした後、腰を掴む。

当然、ヨシュアのアナルをオナホとして使うためだ。

そして、そんなヨシュアのアナルは当然処女である。なん
なら童貞だった。冒険者としての大成を夢見て、これまで
俗っぽい欲望を捨てて必死に研鑽を積んできたから。

だが、そんな夢も今日という日にへし折られてしまった。

この先のヨシュアの未来はもはや、オークたちのお嫁さ
ん、孕み袋になるしかないのだから。

「っうあえ……？っお、ほ？♡」

視界が回転したと思った瞬間、今度はぬちゅりと粘着質な
音がした。

いったいなんだろうと、ヨシュアはだらしなあい顔をしな
がら顔を下に向ける。

そこには、さっきヨシュアの口の中を凌辱したばかりの凶
悪おちんぽがあり、ヨシュアの処女雄まんこの縁にあてがわ
れていた。

だが、それを見てもヨシュアの心に恐怖は沸き上がらない。

むしろ、もっともっと気持ちよくなれる♡おちんぽケースとしてのお仕事ができる♡なんて普段のヨシュアが絶対に考えないような屈辱的な考えに至っていた。

顔を上げる。チャンピオンがにたありと、凶悪な笑みを浮かべ、引き締まった細い腰をがっしりと掴む。鋭い爪の先がヨシュアの腰に食い込み、ぷつりと音を立てて裂いた。

痛い。痛いはずだが、それすらぞくぞくと痺れるような快感を与えてきて、ヨシュアはだらしない顔で小さく喘いだ。

もう完全に、全身.....脳みそまでオークの精液で快樂漬けにされているのだ。

「んぎゃっ♡おっぎ、おっぎいゝいゝ.....ちんこっ、しゅごっおゝい.....イゝ♡♡♡」

どちゅん！

男はヨシュアが準備できているか、できていないかなど関係なく、剛直を欲望のままヨシュアのアナルに突き立てた。

オークの精液には筋肉の弛緩効果もある。

おかげで慣らしていないにも関わらず、ヨシュアの尻の穴は柔らかく蕩けてそのための器官であるかのように裂けることなく広がり、剛直を受け止めてしまった。

しかも、痛みも圧迫感も勝手に快感に変換されていくのだ。

「あぎっ♡んっお、おゝはら、いっばあゝどちゅ、どちゅされて、っえゝ♡」

ばちゅ、どちゅっどちゅんッッッ！！♡♡♡

激しく上下に身体を動かされ、視界ががくがくブレる。縦にシェイクされるたび、奥までちんぽが入るたび、腹がぼこりと歪に膨らみ、内臓が押し上げられる。

それがたまらなく気持ちよくて、ヨシュアは無意識のうちにきゅうきゅうナカを締め上げ、チャンピオンを楽しませていく。

なにせ、キッツキッツの処女マンだ。しかも、普通の女とは違って鍛えている剣士の身体であり、それが極上の快樂をオークに与えていた。

「グルルッガウッゝ〜」

「んひっ♡おおぎぐ、なったっあゝ♡っおほ♡はひゅっ
.....♡んうううゝウゝっ、いぎゅっ♡あぢゅくて、きも
ぢ、よしゅぎつい.....イっぢゃ.....っあゝ♡♡♡」

気分よさそうにチャンピオンが喉を鳴らし吠え長ける。その
の快楽がよりいっそう相手を駆り立てることになったらし
い。

口の端から涎を垂らし、チャンピオンは先ほどよりも激し
く、強い力で腰を叩きつけ始める。重たい緑色の玉がヨシュ
アの引き締まった尻をぱちん♡ぱちん♡と音を立てて叩い
た。

「ひいんっ♡あふっ♡っお、おあゝ♡アう♡」

ぱちん♡ぱちん♡ぱちんっ♡

リズムカルに当たる肉に合わせてちんぽもヨシュアの雌穴
を出入りし、入口から腹の奥、結腸まで、いいところをぜ〜
んぶたっぷり苛め抜かれる。

気持ちいい。こんなの、人間相手じゃ絶対に味わえない♡

ひと突きされるたびに脳髓が蕩けるような快感を叩きこまれ、ヨシュアはよがり狂う。

もっと欲しい。おちんぼ最高♡こんなことなら剣士なんてせずに、もっと早くオーク様のおちんぼケースになっていればよかった♡

そんな尊厳破壊ともいえる思考に蝕まれながら、触れてもいないちんこからぷしゃっ♡と漏らしたみたいに潮を吐きだす。

口にしている通り、すでにヨシュアはメスイキを繰り返している状態だ。オークちんぼが結腸の中に亀頭をねじ込むたび、濁った聞くに堪えない喘ぎ声をあげながら、深い絶頂に見舞われている。

その結果、メスイキのたびにちんぼをぎゅっぎゅっ♡と勤勉に締め上げて、おちんぼ様にご奉仕することになったわけで。

「グルルオオオオッ！」

「いぐっ♡あぢゅいの、ぐ、っるぅ♡♡はひっ.....ふーっ♡
ふーっ♡っお、おおお♡ ———～～～～っおほ♡♡♡」

びゆるるる、びゆる、びゅううううううっ♡♡♡

さっき咥内に放たれたのと同量の、粘っこいヨーグルトの
ような精液が今度はヨシュアの腹の中に放たれた。

同時に本能的に、孕まされた♡と察してしまう。他種の腹
を使って子孫を増やすオークチャンピオンの精液は雄雌関係
なくほぼ百パーセントの確率で孕ませる、あまりにも強すぎ
る子種なのだ。

そして、それに苗床が嫌悪感を抱くこともない。なんなら
オークさまの子供を孕んだなどという歪な幸福感すら覚える
ように仕向けられている。

「っおひ♡っふあ.....あうぅ♡♡♡しゅご、っお、おな
か、ふくらんで、さけちゃっあ♡♡♡」

人間のものと比べ物にならない濁流は、ただでさえオークちんぽでみっちり埋まった腹の中をさらに膨らませていく。

普通なら苦痛を感じるはずなのに、快感しか感じない。気持ちいい。精液が腹いっぱい食べられて嬉しい。哀れなヨシュアは裂けると口にしながらも快感にあえぎ続けていた。

しかし、それもとうとう困難になってしまう。なぜならあまりにも精液の量が多すぎて、口に向かって逆流してきたから。

「っおげえ.....♡っげぼ、かひゅっ.....オツエエエエッ
♡♡♡」

我慢しようともせず、こみあげてくる吐き気のままにヨシュアは口からオークの精液を吐き出した。

息もうまくできず、口からぼとぼとと半ば固形のようなぷりっぷりの媚薬ザーメンが落ちていく様を見て、他のオークたちは指をさしたり手を叩いて喜ぶ。